

序・ミレニアムの告白

世紀が変わり、新しい時代が来たかのような世間の喧騒に便乗して、私はとうとうすべてを語る決意を固めた。尋常な精神状態であれば、とてもそうすることは不可能である。三十年前のあの年の陰惨な事件と体験について、この機会を逃せば、きっと私はまた長い鬱状態に落ち込み、嚴重な監視と間断ない治療が必要となるに決まっている。私の年齢からすれば、これはおそらく最後のチャンスであるに違いない。時は流れ、あの事件の当事者たちの多くはすでにこの世になく、存命であったとしても、社会から引退する年齢を迎えているはずである。ここで真実を語ったところで、もはや大きな影響をもたらすほどの長い余生が彼らにあるとは思えない。

三十年前のあの年――

私のそれからの人生を廃墟にしたあの事件。

ああ、晃子、晃子、晃子……

しかしそれについて理解するには、さらに十年遡り、四十年前の彼女との出会いから語り始めなければならぬい……………。

第一章 村への移住家族

私は信州の山間に位置するq村に生まれ、育った。

村は四方を山で囲まれていて農業と林業とで生計を立てていた。盆地の気象であり、夏は時に四十度近くに気温が跳ね上がる。風の通り抜けが乏しく、ジメジメとした、うだるような暑さになった。逆に冬は凍えるほどの寒さとなる。人口は千人は越えていたと思われる。登山道があるくらいで、名所というものはなく、概して静かな村であった。

私の家庭は普通の暮らし向きであった。私はその次男である。が、家庭はこの物語にとくに関与するものではないから詳細は省略しよう。私は野山で無邪気に遊び、健康に育った。病気らしい病気は一つも経験せずに、——校に入学した。学力は真ん中程度だったが、受験戦争のない時代で、誰に咎め立てられもせず、——四年にまで成長した。

そんなとき、村にちょっとした異変が起こった。都会から、ある一家が移住してきたのである。冬が終わりか

けた季節だっただろうか。都会に出ていく家族はあっても、入ってくる家族は珍しかった。それも、まったくこの土地には縁もゆかりもない人々である。当然、村の話題になった。まだ三十代の若い夫婦と子供一人の三人家族であった。彼らは廃屋になった離農者の建物を購入し、修理して住んだ。村の大人たちは夫婦の素性を話題にしていたが、子供である私の好奇心は彼らの息子に集中していた。なぜなら年格好が私と同年代であったからだ。新学期になると、彼は村に一つしかない——校の、私のクラスに編入されてきた。名前を芳田和良といい、実に真面目で頭のいい子供だった。

——校にもう一人、新しい顔がお目見えした。臨時教員として奉職した女性教師である。名前を、芳田晃子と聞いた。つまり和良の母親である。子供心にも晃子は衝撃であった。都会からやってきた新任の女性教師となれば、それだけで児童たちの関心を集めないわけはなかったが、晃子はとても美しく若かったから、いっそう注目の的となったのだ。実際の晃子の年齢は三十歳くらいだったと思うが、何もかもが都会的に洗練されていたので若く見えたのだろう。彼女はすぐに学校の人気者になった。私も晃子が好きではあったが、まだこの時は他の児童たちと隔てるほどの熱狂ではなかったと思う。

それより和良とは教室の席が隣になった縁もあって、すぐに親友になった。彼は頭がいいだけでなくユーモア

があり、話し上手であった。好きな小説のストーリーを語るのがうまかった。私と和良はそれこそ四六時中一緒にいて遊んだ。村では先輩の私が山を案内し、猪や鹿の足跡を発見させたり、虫取りに熱中したりした。野球をやり弁当と一緒に食った。和良には他人を惹きつける何かがあった。

息子とそんなふうに関係付き合いをしていれば、自然、母親である晃子とも会う回数は増えた。晃子は教師としての立場上、私にだけ優しくするわけにもいかなかったらしく、距離を置いている感じだったが、それでも私の頭を撫でたり菓子をくれたりした。笑顔も不足なく見せてくれた。和良の良好な性格はこの親から受け継いだものなのだろうと子供心に判断したくらいである。

この頃から、私の心は次第に芳田晃子へ普通の児童のものとは次元の違った注目をしていたようだった。

第二章 行水

その年の夏休みのある日、私と和良は数人の仲間を誘って、村の近くを流れる川へ水遊びに出かけた。日頃は危険だからといい顔をしない親たちも、連日の酷暑に砂埃の舞うグラウンドでの野球ばかりでは不憫に思ったのか、許可を与えた。我々は歓声を上げながら川原まで走

っていったが、予想外に水嵩が多く流れも速かった。山の方で局地的に降った雨が時差を経て麓に集中してきたらしい。水浴に危険な状況であるのは少年たちにも理解できた。我々は口々に不平を言い、それでも素っ裸になって石を水面にぶついたり、水際で水を掛け合ったりしてお茶を濁していたのだったが、興に乗らぬこと甚だしい。

そのうち和良が、ここから最も近い自分の家まで競争しよう、一等をとった者には母親に言って西瓜を褒美としてもらえるようにしてやろう、と宣言した。和良の母は『芳田先生』である。いつの時代も人気第一位の教師の自宅は児童たちにとって興味津々の場所である。

皆、晃子を好んでいた。

教室で君臨するようなそれまでの村の教師たちとは違い、晃子は何事に付けてもよく児童たちの声を聞く教師だった。優しい言葉で微笑みながら話し、少年の知らない物事を教えてくれた。温かみと頭の良さを兼ね備えた教師だった。

そしてなにしろ美しかったのだ。

和良の提案に、我々は当然賛成し、また歓声を上げながら田舎の道を全力で走った。その少年たちの中では、私の足が最も強かった。砂利道を走り、土手を登り、畦道を駆け抜けた。夢中で和良の、いや、晃子の家に飛び込んだときは仲間たちに圧倒的な差を付けてしまってい

た。彼らはまだ遠くの方で気配もなかった。私はこの勝利におおいに満足した。もちろんそれは学校以外での『芳田先生』を独占できる権利を獲得したからである。

私は呼吸を整え、かなり緊張して家の扉を叩いた。返事がなかったので引き戸をあけ、声をかけてみた。しかし緊張のためか大きな声が出ない。度胸のない私は皆が来るまで待とうかと思った。

和良にはたしか小説家の父親がいたのであった。小説家とはいつも家にいて仕事をしている職業らしい。私は自分の親たちからそういう情報を仕入れていた。和良の父、晃子の夫の三郎は正確には小説家ではなく高哲な論文や芸術のエッセイを書く文筆家といった種類のものだったのだが、その頃の私には区別の付けようもなかった。ただ、そんな得体の知れない大人と遭遇するのは恐怖である。

私は玄関の横の銀杏の木に寄りかかって待つことにした。すぐに、庭の方から物音がしてくるのに気づいた。水の碎ける音である。きっと晃子が洗濯をしているのだと私は早合点した。当時、まだ電気洗濯機は都会から離れた僻地の村には普及していなかった。私は建物に隠れている庭の東側へこっそりと忍び込んでいった。

それは、広い意味で洗濯と言えなくもない光景だった。

裸の女性が一人、たらいの前で行水をしている姿があ

ったのだ。頭髪をまとめて上げたところに手ぬぐいを巻いている。真白な背中を私に向けていた。下半身はちょうど木立の緑に隠れていた。桶に汲んだ蒼い水を肩から背中に流した。水は肩甲骨のあたりに弾け、腰のくびれまで濡らした。私はまばたきをするのも忘れて見入ってしまう。その女性が幌子であるのははっきりしている。学校での幌子の洋服姿からは遠く離れているけれど、ちらちらと見える横顔は間違いなかった。

自分が担任教師の糸まとわぬ裸体を見ている事実には私は衝撃を受けてしまった。

行水もまたその頃の村では当たり前の光景だった。シャワーもなければ冷房もないのである。真夏にはうっかり路地に足を踏み入れるとどこかの中年女が諸肌を脱いで身体を洗っていたりした。都会から移り住んできた幌子も特に抵抗なくその習慣を受け入れていたのだろう。

しかし私は自分が『覗き』という犯罪を為している自責に貫かれているのにもかかわらず、それよりも好奇心と性的な欲求が上回り、その場を逃げ出さないでいる自分自身に衝撃を受けてしまったのだ。桶を使うたびにくねる身体の曲線や、腕の付け根の筋肉のうごめき、軟らかな女体の鮮やかさをはっきりと男の自分が自覚したのだ。これが女なんだと、私は凄く興奮したのだ。

私はヘマをした。少し大きな石を踏んで音を立てたのだ。

たんとんと無防備で膚に水を打っていた晃子がびくりとして振り向いた。化粧のないつるんとした洗い立ての顔が驚いている。ほっそりとした首筋から肩が輝くように濡れている。鎖骨には水玉が浮いている。とても幸福そうな乳房が並んでいる。

自分の母親のものとは比較できなかったが、あまりにも違うので笑いそうになったくらいだ。女によって違うのだと初めて知ったわけだ。母親のは肥満の体型に比例した、杵で殴りつけた塊のままの餅のような乳だったが、晃子のはよくこねり、両手でもぎとって形を整えた、食す直前の餅のような乳である。細身の体格にあった理知的な大きさである。乳輪は桃色に近く、はっきりと丸かった。

さて、彼女の目には口をあけて呆然としている受け持ちの児童の姿がどう映っただろうか。「——さん」晃子は私の名前を呼び、頭に巻いていた手ぬぐいで胸を押さえ、少し腰をかがめた。その動作で髪がとかれ、肩にまで垂れかかった。いつも後で束ねているので、ずいぶん印象が違う。こんなに長い髪だったのか。

「もう帰ってきたの、早かったわね」と晃子は落ち着いた声で言った。やや照れてはいたものの、私を咎め立てるような色合いはなかった。どうやっておどおどしている少年の羞恥心を和らげてやろうかと、そればかりに心を砕いている。頭を回転させている。優しさだけが行動

の基礎にある女なのだ。

「先生も水浴びしたくなったのよ。こう暑くてはね」

私は晃子の優しさに対して何か言葉を返さなければならぬと焦ったが、思いつくものはないのだった。私の窮状、というより晃子のほうが困っていたらろうが、二人の気まずい空気を救うように、ようやく遅れていた和良たちの気配が近づいてきた。私は、先生、御免なさい！ と叫んでさっと走り出した。

記念すべき大人への目覚めに私はすっかり興奮し、玄関先で仲間と合流しても、どこか上の空であった。とくに和良と視線が合うたびに罪の意識を感じて、かなりぎこちない態度になった。

和良を先頭に家へ入ると、薄紫色のアジサイ柄が清潔な、浴衣姿の晃子が出迎えた。髪の毛は後へ結ばれていた。私は晃子と視線を合わさなかったが、他の少年たちは大好きな芳田先生にまわりついた。浴衣が隠さない彼女の肌……整った顔、長い首、上品な手、歩くたびにわずかにのぞけるふくらはぎ……どれも潤いと爽やかさに満ちて輝いていた。

晃子は私たちの話しをいつものようによく聞き、笑顔で接した。約束どおり西瓜を割って一番初めに私に食べさせてくれた。贅沢品は何一つなかったが、自分たちで改造した家の中を案内してくれたし、自分で描いた水彩画やアルバムなどを見せてくれた。夫は町へ出かけてい

るということだった。

そういえば、アルバムには印象に残る一枚があった。産まれたばかりの赤ん坊の和良を抱いて、白い歯を見せながら満面に笑みを浮かべている十年前の晃子を写したスナップだ。授乳期間の真っ只中であつたらしく、二十歳の晃子のセーターの胸のふくらみははち切れんばかりであるようだった。私は自分の目に焼きついている、ついさっきの晃子の乳房の大きさと写真のそれを比較してみた。私の母親は、よく冗談混じりに、お前を産んだおかげですっかり弛んでしまったよ、と嘆いていたが、晃子の乳房も同じように出産にともない一度、大きく膨らんで元に戻つたらしい。出産年齢が若かったため、その影響はほとんど残っていなかったのだ。私は自分に親切な人間の肉体をまるで牛や豚のように品評している事実気づいて、後ろ暗さに怯えたりした。

少年の一人が川遊びが出来なくて本当に残念だとふくれている。晃子はその子の頭を撫でながら、「水が引けばすぐに泳げるようになるよ」と慰めている。もう一人の子が、「僕は川で遊ぶより、やっぱり戦争ごっこが好きだ」と主張した。それを契機に戦争ごっこ好き派と嫌い派に分かれて論争が始まった。晃子は黙って聞いている。好戦派の急先鋒の子が、将来は絶対に軍隊に入って本物の戦争をやるんだ、だって悪い奴をやっつけられるし、お金も儲かるんだからと得意げに言う。日本が隣国

に勃発した戦争の特需を起爆にして好景気へ突入していた時代である。大人の浮ついた雰囲気の子供に伝染していても不思議ではなかった。

晃子がふと立ち上がり、大きな本を持ってきて縁側で広げた。皆は彼女を取り囲み、彼女の指が繰る頁に見入った。夏の日差しが晃子の膚をくっきりと染め上げている。それは広島や長崎の原爆の惨状を克明に記録した写真集だった。晃子は無残な一枚一枚を説明しながら、戦争ごっこは楽しいけれど、戦争はちっとも楽しいものではないと話した。

「皆や皆の家族がこんなふうになってしまうなんて、先生はとても耐えられないわ。戦争を面白いというのは戦争の本当の姿を知らない人だけよ」と、いつもより少し強い口調で言った。平和な社会を作るのが私たちにかせられた責任だと、少し難しい言葉もつかった。

やりこめられた形になった少年は不満げな顔をして悔しまぎれに主張した。

「先生はアカだからそう言うんだよ。だって、かあちゃんもとうちゃんも言ってたもの。アカは国のことより人のことばかり大切にすることから国を滅ぼすんだって。芳田先生はそのうち駐在さんに逮捕されるだろうってさ」

晃子はそれについてたしなめはせず、大人の理屈で丸め込もうともせずに、押し黙るだけだった。

そういった噂があるとはその時初めて知ったのだが、

意外ではないのだった。都会からこんな山奥の村へ移住してきた芳田夫婦の経歴には当然、村の全住民が関心をもっていた。夫の三郎についてとくに多くの噂が流れていた。前年の昭和三五年は日本中を巻き込んだ政治運動の季節だった。大学を辞めたのはこの時の政治的な理由だったのであり、今でもそっちの組織のシンパであるらしいとの筋書きが人気である。晃子の明晰さと若さは嫉妬も手伝ってその噂を補強するものとなっている。今は皮をかぶっているが、そのうち子供たちに危険思想を植えつけようとするのではないか、とか、組織の幹部には女があてがわれて夫婦を偽装するものだ、とか、酒席を中心に根拠のない話が興味本位で語られていたのだ。

晃子本人の耳にもきっと入っているに違いなかった。娯楽の乏しい村ではやむを得ないのかもしれないが、種にされるほうはたまったものではない。

晃子の家での出来事から二日たって事件は起こった。

「芳田先生が校長先生に怒られている」と情報が少年たちに走ったのだ。理由は我々に西瓜をご馳走したからだと言訳のわからないものだったが、大好きな芳田先生が大嫌いな校長先生に自分たちが原因で怒られるのは許しがたい話だった。さっそく偵察隊を学校にやって、いざとなれば乗り込み救出しようと相談がまとまった。和良だけがその輪に加わらなかった。私は最も張り切って偵察隊を先導した。

校長室が目的の場所である。校庭からグラウンド沿いに校舎の壁を触りながら進めば、一番奥のところにそれがある。窓は開け放たれていた。蝉時雨に消されて、我々の足音などは目立たないだろう。

校長の大きな声が聴こえてきた。

「おかしいんじゃないですか、芳田先生！」

その一喝に私以外のメンバーは震え上がり、来た道を逃げ帰ってしまった。

校長は晃子とは正反対の教師で、威張るためにその職についたような人間であった。子供の話しなどうるさそうに払いのけるばかりである。規律に執着し児童をよく殴った。怖がるのも無理はない。私も膝ががくがくしたが、他の少年たちとは晃子への想いが違う。なんと言っても裸を知っている女である。捨てていけるはずがない。用意してきていた木箱を踏み台にして恐る恐る窓枠から一センチだけ顔を覗かしてみた。

大きな机の大きな椅子にふんぞり返ったベスト姿の校長と晃子に対峙しているのが見えた。晃子は白い半袖のブラウスを着ていた。横顔から察して緊張はしているものの、泣いていたり怯えていたりはないのだった。冷静な性格がここでも認められる。校長は大きな声で説教しているのだった。むろん西瓜をご馳走したからではなく、児童たちに反戦思想を吹き込んだのではないかという点だった。あの時の一件が少年たちの中の誰か

を通して親の耳に入り、校長に通報した者がいたのだろう。

状況は、校長が十、喋ると、晃子がようやく一、反論するといった感じだった。それでも旗色は晃子の方がよさそうだった。晃子は正論を展開していたからだろう。やりとりのうち、校長の言葉は断片的にしか記憶に残っていない。「幼い子に」「写真」「アナキスト」「父兄が怒っている」「校長は私だ」「思想教育」などと機関銃のようにまくしたてる。逆に晃子の数少ない反論は明瞭に記憶に残っていた。

「刺激はあったかも知れませんが真実の姿です。もうしっかり受けとめられる年齢です」——「問題を提起するのは大切なことです。戦争の悲惨さを知って、なお戦争を礼賛するのであれば私は文句を言いません。何も見せないで隠しているのは教育のあるべき姿ではないと思います」

やり込められそうになると校長は狡猾にも話題を変えて、側面から晃子を攻撃した。ここからのやりとりは後年酒に酔った校長本人から大人の私が聞いているので、しっかりした記述である。

「つかぬことを訊ねるが、芳田先生の家には大学の人間がよく遊びに来るといのは本当かね？」

夫、三郎の話である。校長は駐在を通じて思想部の人間とも懇意なのは有名だった。思想部とはこの時代に存

在した政治思想犯を専門に内偵、摘発する、公安関係の一部局である。たしかに夫の大学時代に仲間だった同僚や教え子が訪ねて来てはいたのだ。

「私はとやかく言うつもりはないんだがね、父兄の中には恐怖心を持つ者もいるのだから、上司としては把握しておかないと」

「怖がられるような人たちではありません。映画評論をしている仲間でしょう」

「君もそれに加わっているの？」

「とくに組織を作ってやっているのではなく、飲み友達みたいなものですわ。私は宴会を好みませんので」

煙草の煙を吐き出す校長。

「君のご主人はちゃんと収入があるのかな。それほどの売れっ子にも見えないがね」

晃子はやや鼻白んだ。晃子にとって三郎の経済力を云々されるのは最も苛立たしい部分だ。校長はそれをよく知っている。三郎の収入は当時ほとんどゼロに近かったはずである。

「主人の収入に興味がおありなのですか？」

「働かなくとも暮らしていけるのは、どこかの組織からカンパがあるってことだろう」

「そんなものではありません。主人は毎日、文章を書いております。働いていないとは心外です」

「これは失敬した。すると芳田家の家計のほとんどは君

の教師の収入でやりくりしているわけだ。芳田先生も大変だね。甲斐性のない亭主をもってさ」

晃子は物凄い形相で校長を睨んだ。これは覚えている。冷静な彼女も愛する夫を侮辱されると頭に血が上るようだった。

校長は身を乗り出す。

「するとだ。芳田先生が教職から去るような事態にでもなれば、家族はすぐにも路頭に迷ってしまうことになるわけだな」

「—————」

高笑いする校長。どうだ、ぐうの音も出ないだろうとばかり椅子の肘掛けを手で何度も叩いたのだった。教師の人事は校長の裁量が大きく物を言うのである。臨時教員ならなおさら地位は不安定だろう。これは立派な恫喝である。

「まあ、芳田晃子先生も三十路とはいえ、教師としてはまだまだ経験不足は否めない。そここのところを強調して、今回の件は私が骨を折って父兄の動揺を丸く収めましょう。だから芳田先生、今後、あまり派手な言動は慎んでくれたまえよ。寛容な私もそうそうかばいきれませんからな」

『角力に勝って勝負に負ける』そんな言葉があるが、この時の晃子の心境はこれと似たようなものであったかも知れない。子供を愛する気持ちや教育理論といった教

も知れない。子供を愛する気持ちや教育理論といった教師本来の資質でははるかに勝っているのに、社会的な顔役としての威光や蓄財の潤沢さ等々、埒外の実力の違いで発言を封じられてしまったのだから。首根っ子をつかまれて力付くで従わされた感覚。晃子の性格には腸の煮え繰り返る思いだっただろう。

私はその日の夜、風呂場で生まれて初めての自慰をした。晃子の行水の姿、とりわけあの幸福そうな二つの乳房と、校長に経験不足と断定されたときの悔しさにまみれた苦悩の表情を、交互に頭に思い浮かべながら、動物的な性欲を解放したのである。

それがサディズムとの、最初の遭遇でもあった。

第三章 融けゆく幸福

和良とはその後もずっと親友として付き合っていた。■学に進学したころから、彼との学力差は圧倒的なものとなったが、それでも和良は友人の一番手に私をいつも選んでくれていた。和良の読書好きはいっそう高じてきて、とても■学生の読む本とは思われないような難しい書物を鞆いっぱい詰めていた。

私は平凡な■学生だった。表面的には……。晃子への思いはこの時期から異様に進んでいた。

痺れさすに十分だった。晃子はあの一件のあと、政治的な行動も言動もとらなかったけれど、校長の体罰主義には猛烈に反対してこれを許さなかった。それは児童たちにも伝わってきていて、晃子の人気は不動のものとなっていた。校長は何かとこじつけては晃子の教育方針を粉碎しようとしたが、晃子は意に返さなかった。そのうち校長は県の教育委員会へ転出となり、——校は晃子の主張が勝利し、平和な授業風景が続いている。

私の心の片隅を支配する幼稚なサディズムは、いつしか正義の味方の女神である晃子と、それを苦しめる悪漢とを登場させて自慰を遂行させようとした。悪漢は言うまでもなく校長がその役を勤めている。卒業式には来賓として彼も列席したのだ。意図的に、晃子と元校長が視線を合わせないようにしているのが、私には理解できた。私の精神のほとんどは子供のままだったが、サディズムの嗅覚だけは別格の早熟を遂げており、晃子と元校長の確執をクラスの誰よりも早く発見していたのだ。私の妄想の中で、元校長は晃子を捕えてこれに激しくビンタを食らわせるのだった。鞭打ちや緊縛などにならないところが微笑ましい。ビンタは元校長の十八番であり、少年の経験における一番過激な暴力の一つだった。それでも、ビンタをされる晃子は上半身が裸であり、あの格好のいい乳房がそのたびに揺れるのである。

フォーマルなジャケットを着た現実の晃子のブラウス

の胸はやはりこの村の女たちの中で最もふくよかで盛り上がっている。サディズムに痺れて、私は卒業式の最中、勃起していた。晃子が卒業生の名前を一人一人読み上げていくのを、私は倒錯した気持ちで聞いていたのだ。私の順番がきて、彼女の唇が私の名前を読むと、その瞬間、私は少量の精液をパンツに放出し、汚してしまっていた。

晃子の教師姿を生徒として見るのは最後になったが、かえって卒業した後のほうが晃子への接近は容易だった。彼女の教え子に対する律儀な平等主義が解けたからである。晃子は自分の息子の親友として私を厚くもてなすようになった。よく夕食や夜食を作ってくれ、一緒に食べる機会もあった。晃子にも愉快的な気性があり、人參嫌いの私に動物の形をした人參をわざわざ作って食べさせようとしたときがあった。幼稚園児並みの扱いだ、と私が怒ると、意地悪な表情をして、あら、赤ん坊のつもりで料理したんだけど、と混ぜっ返すのだった。

そんな楽しい食卓の一時には、彼女の夫であり、和良の父である三郎も、稀ではあったが同席した。三郎は物静かでほとんど会話には加わず、ときおり、晃子のほうを子供の目もはばからずにじっと眺めていたりした。和良はこの父親によく議論を吹っかけた。私には到底、理解できない哲学理論を主張し、父親をやり込めようとした。三郎はたいがい相手にもしなかったが、一度だけ

した。三郎はたいがい相手にもしなかったが、一度だけ反撃し、和良をいとも簡単に立ち往生させた。晃子は父子の様子をニヤニヤと眺めていて、今日は和良の勝ち、とか、今日はお父さんの勝ち、とか、からかい気味に行司役をした。私を取り残されないように気を配るのも忘れていない。

しかし彼女が三郎を見る視線にはどこか悲しげな色合いが含まれている場合もあるようだった。三郎は町の病院に通っているらしく、顔色もいいものには見えなかった。

■学を卒業すると私と和良は別れなければならなくなった。q村には■学までしかなく、進学希望の生徒は町の高校を選ばねばならない。平凡な成績の私は最寄りの町の平凡な高校に平凡な点数で入学を許された。和良は都会にある県内一の進学校に合格した。私は村の自宅からバスで通い、彼は家を出て都会に下宿して通学した。

一人息子と別居せざるをえなくなった晃子は寂しさを隠せない様子だった。道で見かける彼女の姿には、どこか元気がないのである。ただし、晃子の私への親密な感情は反比例するように高まった。和良の不在の代償を私に求めたのだろう。私の姿に和良の面影を重ね映しにしたのだ。立ち話を積極的にしかけてきたし、家にも招かれた。母親にもプライドがあるらしく、決して自分から息子の話題を持ち出したりしないのだが、私が水を向け

高校生になると、私は毎晩、晃子を想って自慰に耽った。知識も豊富になっていたから、晃子は様々な責め苦を味わわされることになった。元校長はここでも大活躍してくれた。よほど覗き見た校長室での晃子との争いが私の心理に強烈だったのだろう。晃子を組み敷くのはいつもこの男であって、私自身ではない。自慰が終了した後、必ず私は晃子を助けるに颯爽と乗り込む王子であり、元校長を打ち倒した。そこまでストーリーを続けて妄想を完結させるのが私の嗜好であった。サディストは卑怯なのである。

最初のうち、学校の休暇ごとに和良は帰省していた。そのたびに芳田家には華やいだ空気が甦った。私も何度も食事に招待された。一向に成長しない幼稚なままの私とはまるで違い、和良は精悍な大人の顔つきになっていくのがわかった。理屈はさらに難解になった。頻繁に高校の保守的な体制を批判した。社会現象への視線も冷徹になっていた。晃子にも手に負えない感じである。父親とはほとんど会話をかわさない。ただ、私とは――生の頃の思い出を屈託なく語り合い、笑った。

だから主婦としての晃子は食卓の話題をそちらの方面に留めておきたい気分になったのだろう。ある日の宴では行水の話を紹介したのだ。

「――さんには、私の恥ずかしいところを覗かれちゃったことがあるんだ」

悪戯っぽく笑う晃子。和良は興味を示し、尋問してきた。私は真っ赤になって、よく覚えていないとシラを切った。できれば、私と晃子の二人だけの秘密に取っておきたかった。もちろん、晃子にとってはまったく些細な事故であったに違いない。今日、突然、思い出したに過ぎなかったのかもしれない。

「おっばいをポロンとね」

面白おかしく語りながら最後にそう言って締めくくった。川遊びの日の一件は和良も覚えていて、なんだ、あの日、そんな大事件が勃発してたのか！ と、指を鳴らした。私を告発するような目で睨み、肘で突き飛ばした。

「あの当時のおふくろのおっばいは立派だっただろう？ こいつ、俺にも黙っていたとは怪しいな。おふくろのこと、好きだったんじゃないのか？」

和良のからかい半分の追及に、私が真面目に否定したので、大笑いになった。

「ま、心配してないぜ。今のおふくろのおっばいはしなびてるから、高校生をノックアウトすることも出来ないさ。な、おふくろ？」

「ひどいわね！ 今だって、これでなかなか、たいしたもののなのだから」

晃子は三十代後半だったはずだが、十年前と少しも魅力が衰えていない。髪の毛が多少、短くなったくらいで

ある。体型も維持されていた。元々が細身だったから脂肪がついたとしても変化が気にならない。胸や腰はおそらく魅力を増したのではないだろうか。

変態ではない正常な芳田家の人々は話題をすぐに変えた。和良は行水の話から先に進んで元校長の近況について訊ねた。

「村長選挙に立候補する噂があるんだって？」

驚いたことにそれは事実だった。県の教育委員会でもあの男は如才なく立ち回ったらしくかなりの要職についていたので、村の政界の常識としてはそうなってもおかしくはないのだったが、村民の支持が特別大きいわけではなかった。

晃子はやれやれといった表情で呆れている。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

第四章 暗雲

助役は村長より、さらに教養のない男で、典型的な田舎役人であった。いつも村長の顔色をうかがい、歓心を買おうと画策した。前例通り事が運ぶことだけに地道を

あげた。部下には村長に輪をかけて尊大であった。

彼は私の名前を呼び捨てると、車を回すようにと命令した。

仕事も終りに近づいた夕刻である。

昭和四五年は十年前と同様、政治の季節だった。全国各地で学生がデモをし、機動隊と衝突を繰り返した。しかしそれは大都市圏だけの状況であって、q村のような郡部の最奥地には無縁の話である。政治的に無知で保守的な村人たちは無気力に政府のやり方を支持しているようだった。

助役がその一人であるのは当然である。私の運転する車の後部座席に乗り込み、ラジオから時事情勢が報じられるのを聴くと、助役は罵りを口にするのだった。

「誰のおかげで大学で授業を受けられると思っているんだ。ゴクツブシめらが！」

私が若者の代表として彼の矢面に立たされるのである。

「ごたくを並べる暇があるんだったら、汗水垂らして働いてみる！」

私は彼のそうしたヒステリーを辛抱強く聞きながら、行く先を言うのを待つのだ。助役はよくそうしてサボタージュの時間を稼ぐのである。ようやく彼は行く先を告げた。

芳田晃子の家だった。

「このクソ暑いのに、つまらん用事を言いおって」

助役に仕事を言い付けられるのは村長だけ。日頃は機嫌を取って重用されようとするのに、陰口は彼のビタミン剤のようなものだ。

去年の三郎の死以来、晃子は一人暮らしを続けている。――校の教師を、おそらく一日も休みはしなかっただろう。児童たちとの授業だけが、彼女を癒し、日常に復帰させるすべだったのだ。和良は葬式の時から、やはり帰省はしていない。一人きりになった母親を励ましに来ても良さそうだったが、春も夏も彼の姿はここには帰らなかった。一度だけ、その件について、私は彼女に主張したことがある。晃子との親交は密になり疎になりしながら、途切れてはいなかった。私は和良が何故帰って来ないのか、と彼を責めたのだ。晃子は寂しげに笑いはしたものの、親が子供の重荷になるようなのは御免だわ、と言った。晃子らしい前向きな意見である。

「和良は大学で色々やっているようなので、母親なんか、忘れてしまっているのよ」

私が、彼は何をやっているのかと問うと、晃子は肩をすくめて答えようとはしなかった。

……晃子に、助役は一体どんな用事があるのだろう。村長の立場に盲従している彼は、もちろん、晃子には厳しい評価を下していた。彼の理想とする女性像、母親像と、晃子の存在はことごとく反発しあってもいる。

「仕事などにうつつを抜かすから亭主が早死にするんだ」

「女が政治的な主張をするなど以ての外。女の浅知恵で口を鉢めば、国が乱れ、人々が惑うだろう。男に従って生きてこそ、世の中は安泰となる」

こずるい助役は自分の意見を私に向かって言うだけであって、決して、他の誰にも言いやしなかった。私を信頼しているのではなく、そもそもまともな人間として扱っていなかったのだろう。

「母親としても失格だ」と助役は車の振動に揺れながら強調した。「あそこの息子はなんだ。父親の四十九日にも戻ってこなかったらしいじゃないか。どういう育て方をしとるのかね。あの女は」

いまいましげに毒づく助役。

「しかも息子は流行に流されて、学生運動のなんとか言うグループのリーダーだって言うのだからね。まったく、村の恥だ、これは」

和良がそうした運動に加わっているのを私はそのとき初めて聞いたが、驚きなど一つもなかった。むしろ、和良がもし加わっていずに、日和見を決め込んでいたとしたら、そちらの方が意外だっただろう。和良とはそういう人間である。晃子が和良の様子を訊ねられて答えなかった理由がわかった。村で噂になれば、晃子の生活にとっても和良の名誉にとっても良い影響はない。

しかし、助役はなぜ知っているのだろうか。村長のもたらした情報だろうか。村長は思想部筋に顔が広いらしいのだ。村長は何かを虎視眈々と狙っていて、晃子に対する諜報活動をしているのかもしれない。すると、今日のこの助役の訪問もそれに関係したものか……？

晃子の家につくと、助役は無言で車から出ていこうとしたが、ふと思い直して私にこう言った。

「お前もくるんだ。芳田先生の教え子だろう。お前の顔を見れば、あの女傑も少しは軟化するかもしれない」

私は複雑な心境だったが、上司の指示とあれば、従うしかなかった。私は助役の後をおって、晃子の家の玄関の前に立った。晃子は来訪者が助役だと知ると、疲労感を漂わせた表情をした。しかしその背後に私の顔があるのを発見すると、多少、それも和らいだ。

「あら、——さん、あなたもご一緒だったの」

晃子は私を必ず、さん付けで呼ぶ。——校の私の姿を知る恩師であれば、もっとくだけた呼び名を使いそうであったが、晃子はそうした面でも私の尊厳を守ろうとした。お前よばわりする元校長や助役とは大違いである。

我々は家に入り、居間でちゃぶ台をはさんで晃子と向かい合った。存在を拒否してみても、晃子の濡れた瞳に見つめられれば、助役如きが平静を保つのは不可能である。晃子は黙って彼を見据えている。丸首のセーターを着ていた。首筋とその付け根の白い膚が見えた。助役は

出されたお茶をすすり、煙草に火をつけて、そわそわとした挙動をつづけるのだ。

「で、芳田先生、先日の話、お考えになっていただけましたかな？」

この発言からすると、助役は何度か晃子の元に通っているらしい。

晃子は落ち着いた声で言った。

「そのお話でしたら前にも答えましたように、お断りさせていただきます」

晃子は私が同席したからといって、とくに発言に影響を受けた風もない。

「こんないい話はないですよ。Mさんはそりゃあもう芳田先生をよく思っていらっしゃるのです」

私は表情にこそ出さなかったが、ずいぶん驚いてしまった。助役はどうやら晃子に縁談を世話しようとしているようなのだ。出てきた名前のMは村の有力者の一人で、闇米で財をなした富農である。たしかに妻を亡くしていたはずだが、歳は六十を越えている。

「主人が死んで、まだ一周忌も終わっていないのに、そういうお話を持ってくること自体、常識的ではないと思いますよ」

晃子はしごくもったもな意見を述べた。淡々として、怒っている様子はない。

「いえいえ、もちろん具体的な話は一周忌を過ぎてから

開始すればいいのでありましてね。とりあえず、先方の素直なお気持ちを芳田先生にも知っていただいて、感動して戴ければな、と」

晃子は知っているかどうか……Mは村長と姻戚関係にある。だからMと夫婦になるということは、あの仇敵の一族に連なるということなのだ。これは一種の嫌がらせだろうと私は思った。村長は晃子を陰湿にからかっているのだ。

晃子は言った。「この歳ですからね。片想いを告白されてもワクワクなんかしませんよ」

晃子はちらりと私を見て、悪戯っぽく目を細める。助役は高笑いした。

「いえいえ、まだまだ非常にお若い。四十を過ぎてから女の本当の魅力が完成されると言うじゃないですか」

「あら、それじゃ、私が完成するまであともう一年、必要だわ。再婚はそれから考えましょう」

頭の良い晃子に皮肉を言っても通用しない。軽くジョークで跳ね返されてしまう。助役は笑って誤魔化したのが攻め込む糸口をつかめない。

「そうは言っても、先生、一生、未亡人であるわけにも、ねえ？ 一人で暮らすのは男だって寂しいですからなあ」

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

第五章 晃子成敗

唐突にそれは開始された。役場で書類の整理をしていた時だった。まだ午前中だったと思う。役場のすべての部屋に響き渡る大音量で拡声器ががなり出したのだ。私は驚いて窓に取り付いた。多くの職員たちも同様に窓から顔を出す。役場前にある一般駐車場に一台の軽トラックが乗り入れている。その荷台の上に一人の男が立ち、拡声器を使いながら、役場へ向かって演説をしているのだった。

トラックの横には横断幕が貼られている。無数の小さな万国旗とともに『地球防衛団』と染め抜かれていた。男の両側にはノボリも立っていた。『爆弾魔の母、芳田晃子に天誅を！』『晃子成敗！晃子御用！』とある。男の衣装は旧陸軍の軍服であった。もちろん村人ではない。

彼の主張は単純で、国民の敵の母親である芳田晃子を学園から追放しろというものである。このままでは学校は爆弾犯人を生み出す温床となると理由を説明した。四十代後半か、五十代といった年齢に見えた。役場が決起

して晃子追放の音頭をとれと促すのだ。なんとか我々にも理解できる主張はそこで途切れ、あとは支離滅裂な晃子への誹謗中傷の連呼になった。

『わたくしは晃子の自分で自分の淫らを慰める姿を見たのです。それはそれはとても汚い——』

聞くに耐えない言葉はさらに続けられた。彼は自分を義憤にかられた『救星の徒』と称した。当初は驚愕の面持ちで覗いていた我々だったが、すぐに頭のイカした人間の行状と悟り、口々にヤジを飛ばしてからかった。それにも飽きてそれぞれ持ち場に戻ったが、拡声器の音はやまずにうるさいことおびただしい。

とうとう村長も村長室から出てきて、これでは仕事にならないと怒りだした。誰かに駐在へ通報させたようだった。駐在はすぐに飛んできて男に退去するように命令した。自称救星の徒氏は非常に素直にそれに従った。それもまた我々の失笑を買った。しかし彼の執念は深いものだったようで、毎日、同じ時間に来て演説をぶつのである。そのたびに駐在とイタチごっこになった。

「ありゃ、芳田先生がどうにかなるまでやめないぞ」

村長はそう言って苦々しい表情をしたが、そのじつ、さほど深刻のようでもない。晃子への中傷を腹の底では楽しんでいるのだ。それは役場の男性のほとんども同じだった。村八分にされている者への同情などないのだった。ポルノですら聞かれぬような過激な表現に感心し興

奮しているのである。

数日がたって自称救星の徒氏は晃子の家の前でも街宣をするようになった。彼はどこかの町から流れてきて野宿をしているらしい。晃子の家の前ではさらに拡声器のボリュームが上げられている。

『こらっ、晃子！ お前は罪深い女だ！ よく聞けっ 晃子！ 天に向かって唾をした貴様の罪は重大だぞ。晃子！』

こんな調子で朝晩やられるのだ。晃子から駐在へ告発が行っているのは当然だ。これはどう見ても名誉毀損である。しかし駐在は逮捕はおろか、晃子の家の前での行為には追いつきにも来ないのである。黙認である。一種の神経責めなのだろう。司法当局の方針なのではなく、村の掟に従っているのだ。

家の中で晃子が耐えている姿が想像された。私もなんとかサディズムが頭をもたげないように必死で耐えていたが、残念ながらそれは長続きしなかった。

私は週に一度の日用品の供給に闇夜に紛れて晃子の家へ向かっていた。夜九時をすぎているだろうか。電柱のない道は暗かった。懐中電灯の光を頼りにしなくてはならないが、建前上、他の村民と出会うのはまずいので、それも気にしなければならなかった。道の向こうからこちらへ来る人影があれば身を隠す用意があるのである。

芳田家宅に近づき、勝手口へ回ろうとしたとき、その

人影が正面の銀杏の木のところを横切るのがわかった。私は慌てて電灯を消し、道の横にある藪へ身体を沈めた。自分の息遣いと虫の音だけがしている。人影の主もまた懐中電灯の光を消していた。するとその人間にも何らかの事情があることになる。私は緊張して目を凝らした。影は足音もなく家の扉にとりつき、ノブを握った。玄関の電球がその人間の顔を映しだした。

私は声にならぬ悲鳴を上げた。『地球防衛団』のあの男の顔だったのだ。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

第六章 強制召喚

思想部が大挙してq村へ乗り込んできたのはまさにその翌日であった。

二十名は越えていたと思われる。彼らは和良のグループを捜索に来たのだ。実家へではない。グループの代表格である和良が土地勘をもつ、この村の周囲の山岳地帯のどこかへ、彼らが逃げ込んだと、そういう情報を得た

らしいのだった。

思想部は村役場の一角に搜索本部を設営し、さっそく周辺市町村の消防団などを招集して、山狩りの準備を開始した。

この搜索を取り仕切るK部長は村長と昵懇の間柄だという。二人は熱い握手をかわして、互いの仕事ぶりを讃え合った。私は村長から特命を帯び、K部長の村での活動を後方支援する役目になった。実態はなんのこともない、ただの雑役係である。

K部長は決して笑わない瞳と、決して変化しない顔色の持ち主であった。口調は丁寧であっても、すべての人間を階級にわけて接しているといった印象であった。私などは最下級の人種と判定しているようである。雲をつく大男でもある。

私はその日の夕方まで山狩りに協力する要員たちの寝場所を確保するため、一秒の休みもなく働かされた。思想部の動きを察知した記者団の対応もしなければならなかった。日が暮れかかると、ようやく仕事も一段落して、私は休憩室でぐったりとしていた。

しかしすぐにK部長に呼び出された。簡易の搜索本部は二階建ての役場の一階部分をすべて占有している。部長は一番奥まったスペースを衝立で仕切って机と椅子を持ち込んでいた。

彼は私が和良の少年時代の親友である事実を知ってい

た。山でよく遊んだのであれば、どの辺りであるか、思いだしてみろという。少年の足で行ける範囲は限られていて、潜伏のためには適さないのではないかと、私がオドオドしながら進言すると、部長はそれもそうだと頷いた。

「お前はなかなか頭がいい」と誉めたりした。「和良の母親はお前の——校時代の教師だったそうだな？」

私は、ええ、そうですと返事をした。

「どんな女であるか？」

私はその質問にどう答えていいかわからず沈黙した。部長はニヤリと歯を見せて笑い、「美人か？」と訊ねる。私を見る目はちっとも笑っていなかった。私は黙ったまま頷いた。そうか、美人か、と言った後、彼はしばらく口を閉ざしたが、やおら立ち上がり、「今からその美人の母親に会いに行こう。記者どもに気づかれると煩わしいから、抜け道で行こう。お前はそういうのを知っているのだろうか？」

私はさすがにためらって、すぐには動けなかった。晃子が乱暴されたのは昨日である。まだ二十四時間も経過していない。そこへ思想部の部長がドカドカ上がり込んでくるのは、女性として耐えがたい苦痛に違いないだろう。この朝からの大騒動が自分の息子を捕まえるためのものだと、晃子は知っているのだ。それだけでもショックは大きいだろうに。私は昨夜の卑劣な行動をどこかに

おいて、晃子に心底同情をしていたのだった。

K部長は私を急ぎ立て、車を運転させた。人口が倍になった感じの村内を回り道しながら、晃子の家の前に到着した。

「お前はここで待て」

部長は車をおりていって家の扉をノックしている。

そういえば、あの自称救星の徒はどこにいるのだろうか？ このどさくさに紛れて、すでに村から逃亡したに違いなかった。

扉が緩慢に十センチほど開いた。晃子が極度の警戒をしているのだ。部長は傍若無人にノブを取って大きく全開させた。晃子の姿がちらりと見えた。寝巻の上にカーディガンを羽織っているようだった。床に伏せていたのだろう。おそらく暴漢の責め苦は執拗で長時間に渡ったのだ。腰が持ち上がらないほど、肉体は疲弊したのだ。晃子の顔は蒼白で、重病人のようだった。部長を見上げる目は隈を作っており、殴られた痕跡のようでもある。

押し問答の末に、部長は半ば強引に玄関へ入っていった。

私は二日連続して晃子の家の前で中の様子を、探るように待つ羽目になったが、今日は屋根裏へ忍び込む勇氣はなかった。まだ日の明るさも残っているし、思想部の部長を出し抜けるとも思えない。

K部長がその巨体を扉から現したのは、たっぷり二時

間はたったあとだった。彼は車の後部座席に乗り込むと、開口一番、「お前の言ったとおり、美人だったぞ」と上機嫌に言った。私は車を発進させた。

「相当、参っている様子だったがな」

当たり前だ。人生最悪の昨日今日である。さすがの晃子といえどもボロボロだろう。

「それになかなか頭もいい。しぶとそうな手応えがある」

部長は釣り師が大物の魚を発見したような生き生きとした声で話した。

「明日からは面白くなりそうだ」

その言葉どおり、すべては二日目から始まったのだ。

以下は有料本編でお読みください。

#####